

作品の閲覧

2026-1-28

『星と祭』

何でも読もう会

書物名	『星と祭』	開催日	出席者
作 者	井上 靖	1月28日	8名

＜作品の内容等＞

会社社長の架山が7年前に琵琶湖で娘・みはるを亡くします。遺体は見つからず、架山にとって娘の死を受け入れられず『殯（むがり）』＝「生と死のはざま」にいる状態であり、深い喪失感を抱え続けます。ボート転覆事故で娘と共に亡くなった青年の父親に誘われ、琵琶湖畔の古寺を訪れます。また仲間に誘われヒマヤラの観月旅行を通じて、娘の死の意味を探求し、自信の内面に深く向き合おうとします。そして8年もの歳月をかけて琵琶湖の十一面観音巡りを行い、少しずつ心の平安を得ていく様子が描かれます。

架山の対比として、息子を亡くした大三浦は現実を受け入れ、琵琶湖湖畔の十一面観音を巡るという行動を起こし、息子の冥福を祈り、自分の心を鎮めます。

＜皆さんのが感想意見＞

- ・湖北の十一面観音像とヒマラヤ・トレッキングの描写が精緻。
- ・実存と虚像、意識と無意識、陰と陽の世界など、著者の東洋哲学的思考が表出されている。
- ・白洲正子の『かくれ里』や『十一面観音像巡り』に刺激され、長浜、海津、今津まで歩いたことがある。お寺ではなく、地元の方が昔からお守りしているのに感激したのを思い出した。
- ・タイトル『星と祭』の星は運命を表し、祭は鎮魂を意味していると知りました。そしてヒマラでは永劫を感じたとのこと。
- ・主人公の架山と大三浦を比較してみると、悲しみの表し方の違いを感じました。